

気づけば今年もあと10日ほど。急に寒くなってきましたが、お元気で年末年始をお過ごしください。

現在会員登録数4,369人さま。次号は1月21日発行の予定です／

☆..:*.. ★..:*.. ☆..:*.. ☆..:*.. ★..:*..

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

☆..:*.. ★..:*.. ☆..:*.. ★..:*.. ☆..:*.. ★..:*..

【1】お知らせ

● «ご寄付をお願いします» 当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

● YouTube版「本の海大冒険」 <https://www.youtube.com/@iicloll196>

※公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● Instagram 随時更新 https://www.instagram.com/iiclo_official/

● X（旧Twitter）毎日更新 https://twitter.com/IICLO_News

【2】コラム

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Yukiko's Talk

『ぼくたちは宇宙のなかで』カチャ・ペーレン/著 こだまともこ/訳 評論社 2024年11月 対象年齢：小学校高学年以上

*今回のゲストは武庫川女子大学の福本由紀子さん（F）です。

あらすじ：10歳のフランクは、弟が生まれるまで画家であったママと、自閉スペクトラム症の5歳年下の弟マックス、パパの4人暮らし。ママは、言葉を発さずに叫び声をあげたり、メルトダウンといって全身怒りのかたまり

のようになってしまったりするマックスの世話を追われ、フランクは寂しい思いをしていた。マックスは特別な学校へ行くことになり、少しずつ成長していくが、ある日、ママが発作で倒れるという事件が起きる。これらの出来事がフランクの視点で書かれている。

F：家族や友人との絆が深く心に残る作品でした。

Y：フランクが弟マックスのことを級友にからかわれ、自分の友だちは言い返してくれたのに、自分は何も言えなかったことを後悔する様子が描かれ、フランクの複雑な思いが伝わってきました。

F：「結びつける」「くっつける」というイメージが何度もでてきました。ママやパパが子どもたちを抱きしめるだけでなく、フランクとママが手をつないでモールス信号でコミュニケーションをとる、大けがをしたフランクの傷がくっつく、学校の授業でファミリーツリーを作る、フランクとフランクの友だちとマックスが手をつなぐなどの場面がありました。

Y：もう一つのキーワードが「宇宙」です。ママは、子どもたちに向かって何度も二人が自分にとって「星で、大空で、銀河で、果てしない宇宙だ」と言います。このママの言葉は実は、伏線になっており、後半でフランクたちがママのことを「宇宙」ととらえるようになることとつながります。数字や暗号にこだわるフランクが世界を宇宙として理解しようとする様子を納得しながら読みました。

F：そして「ワイルド」もキーワードです。マックスは、『かいじゅうたちのいるところ』（原題 Where the Wild Things Are）のように暴れまわりますが、フランクは、そのワイルドさの中に、マックスの気持ちを読み取るようになります。私は、フランクとマックスの周りの大人たちがとても温かく、必要な支援をし続けているところも印象深かったです。

Y：私は2回読みました。1回目は後半のママが倒れた事件から読み応えがあり、もっと長かったように感じていましたが、2回目に読むと、後半は3分の1強しかなく、驚きました。前半がしっかり描かれていることで、後半の家族の絆の深まりが心に響くのだと思いました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第112回「雁の童子」

砂漠のへりの泉で

中国の西方地域、「西域」を舞台とする童話の一つです。流沙といいますが、タクラマカン砂漠のこと。砂漠の南の楊にかこまれた小さな泉のほとりで、巡礼のおじいさんが「私」に語ります。泉の後ろの小さな祠にまつられている天の童子の話です。

沙車という国の須利耶圭は、写経をする信心の厚い人でした。須利耶が、鉄砲をもった従弟の殺生をたしなめて（どんなものでもいのちは悲しいものなのだぞ）といいますが、従弟は、大きな黒い雁の列につぎつぎと弾丸を撃ち込みます。6疋の雁が人のかたちになって地上に落ち、また天にのぼります。罪があつて雁のすがたになっていた者たちが報いを果たして、天に帰ったのです。

傷つかなかつた小さな1疋だけが子どものすがたで残り、須利耶があずかつて、奥様とともに育てることになります。人びとは、その子を「雁の童子」と呼びました。

おじいさんは、春のおわりには野原一面の楊の花が光って飛ぶ沙車のようすをまじえて話しつづけます。もう六つになった童子のエピソードがいくつか語られます。

ある晩、ねつけない童子が（おっかさんねむられないよう）というので、須利耶が外へ連れ出すと、童子は、水の流れる音を聞いて、（お父さん、水は夜でも流れるのですか）とたずねます。須利耶が（水は夜でも昼でも、平らな所でさえなかったら、いつ迄もいつ迄も流れるのだ。）と教えると、童子がやっと落ち着いたという話。食卓で須利耶の奥様が箸で魚を小さく砕くのを見ていた童子が急に外へ走り出して、空にむかって大声で泣き出した話などです。童子がいのちの悲しみにふれた場面です。

雁の童子は誰なのか。沙車の町はずれの砂のなかから、沙車大寺のあとが掘り出されます。一つの壁がそのままのかたちで見つかり、そこには、三人の天の童子が描かれていました。町を歩いていた童子と須利耶が壁の絵を見たとたんに、童子は倒れかかり、須利耶が抱きとめます。童子は、もう浅くなった息で自分が壁に描かれたいきさつを語ります。（私はどこへも行きたくありません。）といいながら。

通りがかりの旅人が旅人に語った話です。「私」は、まっすぐに立って合掌して、「尊いお物語をありがとうございました。」とお礼をいいます。——「まことにお互い、ちょっと砂漠のへりの泉で、お眼にかかって、ただ一時を、一緒に過ごただけではございますが、これもかりそめの事ではないと存じます。」かりそめではない出会いで語られたのは、天から降りてきた童子のいのちの悲しみでした。「賢治の“西域物”の中で最も完成度の高い傑作」とは、天沢退二郎の評価です（新潮文庫版『新編 風の又三郎』解説、1989年）。（馬車別当）

（本文の引用は、新潮文庫版『新編 風の又三郎』によりました。）

《3》子どもの本の珠玉のことば 66

おじいさんは、くるしげに叫んだ。「おきな子たちをわたしのところにこさせなさい。神の国はかれらのものである」

「わたしがひとつ走り警察に行ってきます！ 牧師さん」ミセス・ブリンドリーがどなった。

「黙りなさい。うるさい人だ」おじいさんがどなった。

「お説教をきいてるひまはないんですったら」ミセス・ブリンドリーがどなり返した。

「じゃ、どこかに行ってください」おじいさんもまたどなった。

（『クリスマスの猫』ロバート・ウェストール/作 ジョン・ロレンス/絵 坂崎麻子/訳 徳間書店 1994年10月 p.107）

1934年のクリスマス、両親が外国に行ってしまったので、寄宿舍から学校に通っている「あたし」こと、11歳のキャロラインは、イギリス北東部にあるノース・シールズという町の教区牧師のサイモンおじいさんの牧師館で過ごすことになります。おじいさんは、牧師館で、訪ねる人たちは追い返し、口うるさく、おじいさんを仕切っているミセス・ブリンドリーと暮らしていました。

牧師館の中は寒く、ミセス・ブリンドリーにも冷たくされたため、キャロラインは外にでて、敷地内を探険します。そして、塀を乗り越えてきていた同い年ぐらいの少年、ボビーと友だちになります。キャロラインとボビーはおなかの大きい野良猫を見つけ、使われていない馬屋で世話をします。すると、3匹の子猫がうまれます。ボビーはキャロラインに、結核で苦しんでいても見たいという女の子を馬屋に連れてきて子猫を見せたいと言います。

キャロラインは、ミセス・ブリンドリーの目を何とか馬屋からそらすことを約束します。けれど、クリスマスの朝、ミセス・ブリンドリーは馬屋に明りを見つけ、「不法侵入だ！ ごろつきだ！ 泥棒だ！」と言います。キャロライン、おじさん、ミセス・ブリンドリーは馬屋に行き、「まさにキリスト降誕の図」とも言える、子猫たちを見ている子どもたちの姿を目にします。そこで、これまでミセス・ブリンドリーの言うことをすべて肯定していた牧師のおじさんが引用のようにブリンドリーに反論するのです。

キャロラインという少女がクリスマスにノース・シールズの牧師館にやってきたことで、牧師館に大きな変化があり、町での教会の受け入れられ方が変化します。この作品は、おばあさんになったキャロラインが孫娘に語るという枠組みになっており、キャロラインとボビーのクリスマス・ラブストーリーにもなっています。(Y)

《4》 行って来ました！

神戸海洋博物館で2025年1月13日まで開催されている特別展「海を渡るテディベア展～タイタニック ベア オセロの物語～」に行ってきました。タイタニック号沈没事故を悼んでシュタイフ社が制作したテディベア「オセロ」など、世界のテディベア150体以上が船舶模型とともに展示されていました。

「テディベアの歴史 世界で数体しか存在しない貴重品」コーナーでは、パネルで歴史が説明され、それぞれの時代のテディベアがレプリカで紹介されていました。とてもわかりやすく、一目でテディベアの歴史がわかります。「世界のテディベア大集合 世界中で人々の心を癒し続ける」コーナーでは、色や大きさがいろいろなテディベアが展示されていました。パッチワークの布のもの、着物を着ているものもあり、高額で落札されたブランドのドレスを着ているのもあって、世界中でテディベアが愛されていることがわかります。国ごとに紹介されているテディベアの顔つきや毛の縮れ方がいろいろで、国によって好みのテディベアがあるのかなと興味深く感じました。また、「世界を渡った船 クルーズ船とテディベア」コーナーは海洋博物館ならではの企画で、世界を航海する日本のクルーズ船の模型と、船のマスコットテディベアが展示されており、長い船旅の友としてもテディベアが活躍していたことがわかりました。

なんといっても、展示の目玉は、1912年に起きたタイタニック号沈没事故を悼み、人々を癒すために、82体だけ制作されたドイツのシュタイフ社製テディベア「オセロ」の1体が展示されていたことです。テディベア史上世界最高額で落札されて日本にやってきたと解説にありました。オセロは喪に服して、真っ黒な毛並みのモヘアの体で、赤いフェルトの縁どりの黒いボタンの目をしてしています。足の裏のベージュのフェルトが優しい感じで、モヘアも擦り切れてなくてきれいです。おもわず抱きかかえたくなる大きさだと思いました。

もちろん、タイタニック号の船舶模型もありました。

オセロは、手作りで、丁寧に縫製されている様子が伝わりました。いつか私もテディベアを手作りしたいと型紙を大事に持っています。(K)

神戸海洋博物館 <https://kobe-maritime-museum.com/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第16回

第5章 古田足日先生

その2 「散文性のかく得」(上)

ことしは、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』(童心社 1974年)の刊行50周年にあたります。私が古田足日先生(1927~2014年)に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

■-----■

【3】全国のイベント紹介

■-----■

● JBBY 50周年記念国際シンポジウム「いま、子どもの本は世界とどうかかわるのか」(アーカイブ配信)

第1部(ビデオメッセージ上映) = 国際舞台で活躍する子どもの本の作家・画家12人

第2部(シンポジウム) = 岩瀬成子(作家)、長倉洋海(写真家)、さくまゆみこ(翻訳家)、司会・土居安子(IICLO 理事・総括専門員)

配信期間: 12月20日(金)~2025年3月31日(月) ※有料、要申し込み

主催: 日本国際児童図書評議会(JBBY)

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■-----■

【4】プレゼント ☆

■-----■

今号のコラム《1》「この本読んだ?」で紹介しました『ぼくたちは宇宙のなかで』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ(5)このメルマガのご感想をお書きのうえ 応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は1月10日(金)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

—」 —」 —」 —」 —」 —」 —」 —」 —」 —」

地域の子どものサッカークラブを見学しました。4・5歳児から参加していましたが、高学年のボールの奪い合いや鋭いシュートはすごい迫力。スポーツを通して同じ地域の異年齢の子どもたちが交流する楽しさを感じました。当財団も子どもの本を通じ、ますます幅広い年齢の人たちとつながっていきたいと思います。今年もご愛読ありがとうございました。(T A)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いいたします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp

